

## 馬原鉄男——その生涯と学問

はじめに

一九九二年七月二日午後一時三三分、私に部落問題と、研究者としての「へ生き方」を教えてください。最良の師馬原鉄男先生は、帰らぬ人となった。私と馬原先生との出会いについては、七月二十九日の「馬原鉄男先生とお別れする会」で話した内容が、一番わかりやすいと思うので、『部落』の一二月特別号（一九九二年）から、私自身の追悼の言葉を引用する。

私が初めて馬原先生にお会いしたのは、一九六五年の、先ほどから度々お話しに出ている部落解放同盟の分裂を、高校時代に経験した時であります。その時、馬原

今 西 一

先生や藤谷俊雄先生やここにおられる東上高志先生から、部落問題解決の正しい方向について、いろんなお話しを聞かせていただきました。私はしかし、自分自身の力の無さから部落問題をまともに自分の研究課題とすることを、どちらかといえば、大学時代や、それ以降も少し避けていた傾向がありました。

ところが、一九七〇年に馬原先生が、これは必死の思いだったと思うんですが、部落問題の歴史的研究をやるための研究会を、部落問題研究所で再開されました。私も馬原先生や掛谷幸平先生に誘われて、その研究会にできるようになりました。その研究会で、馬原先生の「日本資本主義と部落問題」の構想をいろいろ聞かせていただいたわけです。そのことが、どれだけ大きな

勉強であったかということ、今になってつくづく思い返されます。

それと同時に、馬原先生というすばらしい人格に会えたということが、私の研究をやっぱり大きく変えたと思います。私が駿々堂という本屋で立ち読みしていたら、馬原先生が横に來られて、「おい」と言っ、「おまえ、いつも研究会に來ているな」ということで、その晩飲みで連れて行ってもらったわけです。先生も元氣盛りでしたから、そのまま一晩飲み明かして、家まで行っ「雑炊を食べさせていた」のを、今でも思い出します。

その後、大学を出て研究者になることもあまり氣が進まないし、大学という世界も自分にあまり合わないだろうなと思っ「た私を、三重県の花岡という所の部落調査に誘っ「下さいました。ここに來ておられる伏見信孝さんをはじめ、京都大学の野田公夫君、今、鹿児島大学の助教授になっ「ている坂根嘉弘君とかいゝろんな人が一緒に行っ「たわけですけど、そこで一番驚かされたのは、馬原先生の調査方法であります。我々は、民宿とかそういう所へ泊っ「て調査をすることがあるのですが、馬原先生は部落の青年の家へ泊っ「て、一升ビンを横に置いて、その部落の青年とお母さんからいゝろんな話を聞き出されていゝるか、お母さんや部落

の青年たちは必死になっ「て、馬原先生に差別の問題、結婚の問題、就職の問題を話してゐるわけです。調査といゝるのはこんなものなかとゝいうことを、初めて知らされた思ひがします。

馬原先生は、誰よりも部落の人たちの中に入り、誰よりも部落の人たちの心を開き、そしてその話を聞かれた研究者だと思ひます。その時のその青年たちやお母さんたちが、本当に馬原先生を神様のように思っ「ていました。

私はこゝういゝう調査があるのか、こゝういゝう研究があるのか、といゝうことを思ひ知らされた氣がしました。馬原先生からは、もう一度やっ「ぱり部落問題をやれ、おまえはいつも部落問題から逃げてゐる。おまえの論文はいつも客観主義だけど、部落の人たちの痛みはちつとも伝わっ「てこない、といゝうことを叱られていました。

本稿は、あくまで馬原先生の本格的な伝記を書くための準備ノートとして、読んで頂きたい。

#### 一 馬原鉄男の生い立ち

##### (1) 少年時代と戦争

馬原鉄男は、一九三〇年二月一五日、宮崎県西臼杵郡高千穂町三田井で、父馬原常雄、母アキノの三男として生

まれている。兄が二人、弟が二人、妹が一人の六人兄弟である。馬原家は、祖父の時代に分家し、六丁七反（内一反を自作）を耕作する貧しい小作農であり、父の荷馬車引きなどによって、辛うじて生計をたてていた。後年、氏は「小学校四、五年のころ、収穫時庭先に積み上げられた米俵の半分近くが地主の所に運ばれるのを見て非常にかんがった」と語っている(1)。

高千穂町三田井は、「九州山地中央部、五ヶ瀬川上流、高千穂盆地の中心部に位置する。山間に立地する西臼杵郡で最も平坦」な地である。一八九一年の「戸数四三〇・人口二、八一八（男一、四六四・女一、三五四）、厩一九一、寺院一、学校三、水車場六（徴発物件一覽表）。高千穂町役場所在地。明治六年大区長役場が置かれて以来郡役所の所在地として発展し、中心部は市街地となった。県北の交通の要路で、専売所・税務署・区裁判所・保健所・県支庁・警察署など西臼杵郡行政の役所や銀行が置かれ」た所である(2)。

高千穂でも開けた地域であるが、かつて馬原は——私の出身地の宮崎県を例にとって考えてみますと、たとえば東北の場合ですと、農家の次男・三男はふつうオンチ坊といわれています。深沢七郎の小説に「東北の神武たち」というのがありますが、あれとまったく同じような状態で農家の次男・三男が、長男のため

に飼い殺しにされているわけです。一生嫁をもつこともできなければ、もちろん分家をすることも許されなといった状態で、次男・三男が長男の犠牲にされたのが、かつての宮崎県の農村ではなかったかと思えます。さらにつけ加えますと、そこでは女性に対する差別がきわめてきびしく残されています。

いまでも山間部の農村に行きますと、たとえば女の人の干物はぜったいに家の正面とか日なたには干さないという習慣が残っております。必ずかけ干しといまして、家のうらなどのように全然人の眼につかないところにしか干物はかけないというわけです。あるいはまた同じ場所に洗濯物をほす場合には必ず男の干物が女の干物より上にある。女の干物は、いつでも物干竿の一番下におかれます。もちろんたらいも男と女では厳重に区別されるということも、決して珍しくはなかったということですが。

と、自分の村の「封建性」について語っている(3)。

馬原少年は、一九三九年、高千穂尋常小学校に入学するが、一九四一年の国民学校令によって、同校は途中で高千穂国民学校に変わった。国民学校時代は、家にも学校にも本がなく、家に帰れば長男は手術の失敗で足が悪く、次男は朝鮮へ働きに行っていたので、牛馬の世話や野良仕事におわれ、まったく勉強する時間がとれなかった。ところが

国民学校六年の時に、担任の戸高久先生は、馬原少年が中学校に進学したい希望をもっていることを知って、無料で行ける熊本の航空機乗員養成所を受けることを勧めた。戸高先生が自宅に泊めてくれたので、一カ月位、中学校を受験する生徒に混じって猛勉強をしたが、受験には落ちてしまった。

中学校には学費の関係で進学できず、高等科二年になると、友人たちは、民間企業への就職、少年航空兵・少年戦車隊・水兵へと進路を決めていった。しかし、進学への夢を捨てられなかった馬原少年は、無料で行ける宮崎師範学校を受けて合格した。後に師範学校に行ったのは、「半分は師範学校を出ると軍隊で幹部候補生になれる」という特典があったからだと思っている。無料とはいっても小遣いはいるので、師範学校に行けたのは、父親が荷馬車を引き「歩いて歩いて」日銭を稼いでくれたからである。

一九四五年の四月に宮崎師範に入学するが、戦争も最末期であり、合格通知とともに持って行ったのが、三角巾（繃帯）や血液型を書いた紙であった。翌五月一日に大空襲があり、寮に残っていた同郷の友人が爆撃で死亡し、その無惨な遺体と一夜を明かしたことがある。この空襲で師範の学生だけでも三、四人は死んだであろう。

学校に入っても勉強は出来ず、寮が焼けたので宮崎市から約二〇キロメートル離れた公会堂を借りて合宿生活をし、

昼は農作業をして幾らかの食料を貰って自炊生活を続けた。配給は高粱コウリヤンと麦しかなく、付近の農家から貰った薩摩芋の蔓や野菜を混ぜて雑炊を作るのが大仕事で、唯一の楽しみは近くの農家の農作業を手伝って貰う握り飯であった。

食べ盛りの頃に、栄養失調と皮膚病に悩まされた青春時代であった。そうしているうちに八月一二日の空襲で学校が丸焼になり、翌日、米一升と飯盒を貰って帰郷を命ぜられた。四五里歩いて家に帰る途中、高鍋で敗戦の知らせを聞いた。「暑さと空腹で疲れ切っているせいか、一瞬思考が止まった感じで、ショックよりむしろホッとしました」と、後年語っている<sup>(4)</sup>。周囲には、軍事物資を積んだトラックが忙しそうに走っていた。

馬原は家で農業をしていたが、翌四六年に学校が再開されたので学校に戻った。校舎がないので川南の航空隊の跡の兵舎が使われ、若い教師は東京に戻り、軍国主義者は追放されていたので、教師も定員の半分しかいなかった。しかし、追放された漢文の先生の代わりにやってきた英語の先生から、「民主主義、デモクラシー」という言葉を聞いたのは、新鮮であったと語っている<sup>(5)</sup>。四八年の本科一年の時に宮崎の校舎が再建され、やっと学校らしくなってくる。兵舎跡には図書館もなく、満足に本も読めなかった。

## (2) 学生時代と三ヶ所中学校

本科一年の終了の時に新製の宮崎大学芸学部が変わり、馬原は進学適性検査という初めてのアチーブメント・テストを受けている。新制大学では、過渡的処置として二年コースと四年コースを設定するが、二年コースを選択している。ここで無料だった学校が有料になり、アルバイトらしいアルバイトもなかったので、学費を稼ぐために闇の焼酎の「運び屋」をやっている。

宮崎市の郊外に大島という地域がある。ここは「世帯数は八五〇、うち奄美大島（徳之島をはじめその他の西南諸島も含めて）出身者が半数を占める四五〇、沖縄出身者が二五〇、残りの一五〇が宮崎市周辺の引揚者、戦災者という」寄合世帯である。同地域は、『大島』と名のつて就職した人はごくまれだ。仕方なしに、関西に出稼ぎに出かけるわけであるが、それも、大部分が造船所の臨時工という恵れない職場で我慢しなければならない。結婚にしても例外ではない」という奄美・沖縄差別を受けている地域である。ここでは最盛期の一九五一年に、「実に部落の九割迄が何らかの形で焼酎密造に関係して生活をたてていた」のである。この「頃になると、製造技術もへたな専門の酒造家をしのぐほど熟練し、県内はもとより、隣県の縄のれんにまで『大島焼酎』の名声？を放つていた」(6)。馬原は、大島地域の友人の世話で闇焼酎を買い、五〇度から六〇度の原酒を水枕に入れて、北九州の進駐軍の黒人専用バーに

売りに行っていた。勿論、警察に見つかれば没収か逮捕であった。被差別地域や黒人差別を見た、最初の体験であった。朝鮮戦争下での北九州の黒人暴動も目撃している。

学生運動との係わりでは、一九四九年に自治会の役員になり、同じ下宿にいた宮崎県学連の委員長古葉雄俊らの影響を受け、朝鮮戦争反対運動に参加する。古葉らは、「日本における軍事基地の実態」という地図のついたピラを学内に貼り、農学部活動家たち三人はマッカーサーの勅令違反で逮捕されて退学になった。馬原も芸学部でピラを貼ったが、同じ下宿の友人が剥がしてくれたので、逮捕・退学をまぬがれた。これがアルバイトにおわれるなかで、唯一体験した学生運動であった。この頃、農学部にいた上野裕久先生（憲法学）が学生たちをかばってくれたのを印象深く覚えている。

その頃から読書をするようになり、『きけわだつみのこえ』から始まって、社会科学の本を片っ端から読み出した。河上肇の『貧乏物語』、スターリンの『レーニン主義の基礎』などを読んだが、小泉信三の『共産主義批判の常識』を読んで、逆に共産主義の正しさを確信したという。スポーツでは師範の本科一年から大学一年の頃、当時としては珍しいラグビーをやっていた。

一九五一年の三月に卒業するが学生運動のために就職はなく、学部全員が決まった最後に、やっと僻地の中学校

の教師となった。郷里高千穂の隣の三ヶ所村であるが、同村は「九州山地の一部をなす山間部に位置し、東は二上山・赤土岸山、西に鏡山・祇園山、南に揺山・大仁田山など一、〇〇〇m級の山々に囲まれ」た村である。馬原が赴任する前々年の四九年に「三校の分校を廃して三ヶ所中学校に統合した。校舎は赤谷に建設し、遠距離の生徒のために全国でも数少ない寄宿舎制度を設け」ていた(?)。

教え子のひとり大瀧明男は、次のように当時の三ヶ所中学校時代の思い出を語っている。

熊本県と県境にあり、熊本まで八〇km、バスで二時間余り、一方県庁のある宮崎市までだと五、六時間は充分かかるという、山深い山村の中学校です。

通学はほとんどが徒歩あるいは自転車ですが、二〇kmもある遠い所から登校する生徒は、寄宿舎があつて一週間の米、米と言っても家にあるもの、粟、麦、トウキビのひいたもの、野菜等を持って寄宿舎に泊まります。ここに入れる人はよいのですが、ここに入れない遠い生徒が登校するには、懐中電灯が欠かせません。陽の短い冬の寒い時期には、霜柱が五、六センチ立っている地道を、暗い内からザクザクと踏みしめ、凍てつく寒さに耐えながら二時間近くもかかって登校してきます。雪の降った朝になると、雪道の歩行は二倍位かかりますから、学校に着くのは一一時ごろになった

りもします。先生は「よう来た、よう来た」とさも嬉しそうに生徒を迎えてくれます。

このような山村の中学校に、馬原は、若い五人の新任の教師の一人として、「詰襟の学生服姿」でやってきた。教える教師が二一歳、生徒が一四・五歳という年の差であつた。当時の授業の風景を見ると――

馬原先生は二年B組の担任で、歴史と社会が専門でした。歴史では年表にそつた合戦の話は、まるで映画でも見ている様な楽しい時間でした。百姓一揆や壇の浦の戦いなど、特に合戦ものについては熱の入つた話となつて、五五分の時間では足りない程でした。おわりの鐘が鳴つた後もその余韻が残つたのは、馬原先生の歴史だけだった様な気が致します。……先生方は宿題を出しませんでした。家にはそのような場所と時間がないし、暗くて子沢山だった家庭がほとんどでした。と、先徒に慕われた名授業である。遠足の風景も興味深いものがある。

学校の行事として新学期に先ず遠足があります。鏡山という学校から二時間余りで登れる山ですが、頂上からは九州の連山阿蘇や九重が眺められる景色のいい所です。……男子生徒の中では、お茶の代わりに、焼酎を水筒に入れて来る者もかなりいて、チョコビチョコビと始めます。この焼酎、実は店で売っている焼酎と違つ

て、各家庭の自家製の焼酎です。……

馬原先生をはじめ酒の好きな先生は、その焼酎を没取にかかるとは、先徒も心得たもので、先生にも是非飲んでもらおうと持ってきますから、「先生これはうちの焼酎です」と言っただけで出します。すると先生は、「おお、これはお前とこのか」と水筒のフタで味見をする。「おお、なかなかのもんじや」といいながら集めた焼酎を、先生たちが四、五人で飲まれる。酔いが回り始めると生徒と一緒に神楽舞をしたり、相撲をとったりと、先生と生徒が組んでそこらで転げ廻る。すっかり酔いの廻った先生は、帰る頃には至る所にスリキズだらけ、髪もボウボウで、洋服もドロドロの全身泥まみれで、大の字になって動けなくなります。国体の入場行進の団旗の様に、クラスの生徒が手足や身体にしがみついた様にして、「おい、水くれ、降ろせ、痛い痛い……」と叫ぶ、酔っぱらいの先生を下宿まで運んだりもしました。

今日の管理教育下の学校では、考えられない教師と生徒との交流である。しかし、酒の上での失敗は多かったよう、家庭訪問に行くと、父兄と焼酎を酌み交わした帰り道で、「田植えしたばかりの田んぼに落ち、その拍子に眼鏡も落ちて方向を見失って上り口が判らず、田んぼの中をはいずり廻って、植えた苗」をめちゃめちゃにしたり、「村の兄

ちゃんとかんかをしてみたり」といった、エピソードにも事欠かないようである。また、「朝寝坊の好きな先生で、運動場で朝礼が始まって校長先生の話が進んでいる頃、学級委員でゲタの音をガラガラとたてながら登校してこられる。生徒が一斉に笑いながら先生を迎えた」という、夏目漱石の「坊っちゃん」を地で行くような生活であった。

もうひとつ馬原の青春にとつて忘れられないのは、松岡郁との出会いであった。郁は、一九三二年二月一九日、馬原と同郷の西白杵郡鞍岡村で、三等郵便局長の父松岡勝と母たまつちの長女として生まれた。延岡高等女学校を出て、新制宮崎大学を二年で卒業し、勤めた三ヶ所中学校で馬原と出会ったのである。大淵の話では、「背は小さめですが色白で、シャキツとして、丸々とした女の先生です。女生徒の体育の先生で、フットボールと遊戯の指導にかけては、右に出る者無し、という熱血先生で、気性も竹を割ったような方です。男子生徒も親近感を覚え、理想の先生だと人望も厚かったようです」と語られている。二人の仲は、学校中はもちろん三ヶ所村中に広がった。この人が、現在の郁夫人である(8)。

しかし、三ヶ所村は「総農家戸数七七一戸、うち専業農家五九六戸・兼業農家一七五戸、農用地総面積一、〇〇三町二反」である。農家一戸の平均農用地が一町三反歩余というのは全国平均並みであるが、水田はわずかに「二六九

町八反」しかなく、他は殆ど生産力の低い畑地である。家庭訪問をしても、家のなかに蒲団さえなく、藁のなかに足を入れて寝ている子さえいた。馬原は、自分も貧乏な暮らしをしていたが、そこまでも貧乏な暮らしはしていなかったという。この村の貧しさを直視することから、馬原自身も変わってきた。

また、村の図書館が出来、そこで井上清の『くにのあゆみ批判』（一九五三年）や、岩崎書店の中学生歴史教室を読んで、「初めて歴史の真実を学んだという気がした」という。学生時代から勉強していかないのを痛感し、クラスの生徒が殆ど中学校を出れば零細な家内工業に働きに行くのに、そういう子供たちに「将来をどう生きるのか」と確信をもって教えられないという思いが強くなって、学校を辞めて京都の立命館大学へ再入学することを決心した。

立命館大学を志望したのは、福村書店の中学生歴史文庫のなかでも、北山茂夫の『大仏開眼』や前田一良の『大名・町人・百姓』などの名著があり、北山・前田を始め林屋辰三郎・奈良本辰也・前芝確三など、立命館の先生が最も多く同シリーズの書き手であったからである（表参照）。この三ヶ所中学校を辞める時に、生徒が見送りにきて、生徒の前で必ず帰ってくることを約束したが、今でも忘れられない、といていた。馬原の「精神的原郷」は、いつまでもこの三ヶ所中学校での二年間余の教師生活であった

と考える。

表 中学生歴史文庫（一九五二～二年）

日 本 史	世 界 史
貝塚と古墳	人間の先祖
大仏開眼	文明のあけぼの
源氏と平家	ルネッサンスと宗教改革
豊臣秀吉	産業革命
大名・町人・百姓	フランス大革命
日本の科学者	平和の歴史
明治維新	戦争の歴史
日本の資本主義	労働運動の歴史
日本の民主主義	アメリカの歴史
平和を求めた人々	東洋の文化
近代日本の文学	近代の中国
太平洋戦争	新しいアジア
杉原 莊介	井尻 正二
北山 茂夫	尾鍋 輝彦
西岡虎之助	松田 智雄
林屋辰三郎	三枝 博音
前田 一良	鈴木 正四
高橋 碩一	荒井 信一
服部 之総	江口 朴郎
田中惣五郎	前芝 確三
奈良本辰也	清水 博
遠山 茂樹	飯塚 浩二
猪野 謙二	北山 康夫
松島 栄一	岡倉古志郎

(3) 立命館大学から部落問題研究所へ

一九五三年の一二月に、京都の叔父を頼って上洛し、五年の四月に立命館大学の三回生に学士編入した。同級生には考古学の田辺昭三らがいる。ここでもアルバイトの連続で、家庭教師や映画のエキストラなどで生活費を稼いでいた。当時の大学は、「立命館史学の黄金時代」で、古代



史は北山茂夫、中世史は林屋辰三郎、近世史は前田一良・奈良本辰也、近代史は岩井忠熊、美術史は中井宗太郎の各先生方がおられた。どの授業も愉しかったが、ちょうど林屋は、『歌舞伎以前』（一九五四年）のなかで、戦後歴史学の出発にあたって、戦前には軽視されていた地方史、部落史、女性史という三つの新しい分野の歴史学を提唱し、中央の貴族や武士の歴史に対して地方の民衆、部落民、女性といった抑圧された人々の歴史研究と復権を提言していた時である。この三つの歴史の提唱は、林屋らの天皇制批判でもあった。林屋・奈良本らの影響を受けながら、部落史への関心を深めていった。

学生運動としては、三回生の時に「立命館大学文学部日本史クラス」で、「中学校の歴史教科書批判」を行なっている。これは馬原が中心になってやったもので、日本史研究会の大会や歴教協全国大会などで報告している。歴史は「生産者の歴史であり、常に生産者である人民の歴史であらねばならぬ」という立場からの歴史教科書批判であり、その後の馬原の歴史観の原点となっている<sup>(9)</sup>。四回生になると自治会の副委員長に選ばれ、委員長は後に鳴沂高校の先生になる片岡秀計である。

卒業論文は、奈良本の指導で、筑前の玄洋社の研究を始めた。後に「自由民権運動に於ける玄洋社の歴史的评价」という題目で、『日本史研究』第二八号（一九五六年）に掲

載された論文である。当時の問題意識としては、自由民権運動に関心があったのではなく、貧困を科学的に解明したいということと、封建的な地域の問題に興味があった。軍国主義の痛みということを感じており、何故貧しい人ほど保守的であり、軍国主義や国家主義を支えるのかという問題を考えたからだったという。奈良本は、「戦後、新制になってから最良の卒論であった」といつていた。そのこともあって、卒論の直後、前田から大学に助手として残らないか、という勧めがあったが断った。なにより三ヶ所村に帰る、という郁と生徒たちとの約束があった。

① 部落の現実に接して　しかし一九五六年四月、先輩東上高志の推薦もあり、奈良本のすすめる部落問題研究所に入った。最初、奈良本の話しで、部落問題研究所の給料は、一万三〇〇〇円ということであったが、これは研究所からは七〇〇〇円だけが支給され、後の六〇〇〇円は大学院の奨学金で貰えということであった。研究所の給料は出たり出なかつたりで、しかも奨学金は後でしっかり返還させられた。

当時の部落問題研究所は、七条河原町内浜の京都靴商工組合の二階にあった。奈良本が所長で、所員には木村京太郎・三木一平・東上高志という錚々たる人々と、事務員の渡部幸子がいた。三階には部落解放同盟京都府連があり

(後に解放同盟が二階になり、研究所が三階になる)、木村・三木は解放同盟と兼任で、『解放新聞』の編集を担当していた中西義雄が研究所の非常勤研究員になったりしていた。研究所は、ひどいボロビルのなかにあり、いつも便所の臭気はするし、雨が降ったら雨漏りがするという状態であった。しかも財政状態は最悪で、東上は「私が研究所に入った時点でも、使用済み原稿用紙も全部裏を使っていたし、発送する封筒にも向こうから来たものをひっくり返して使った。そして中央郵便局まで近所の商店で借りたりヤカーに雑誌『部落』をつんで運んで行く、というやり方で、やっと維持されていた」(10)、という。給料も遅配は当たり前で、出たり出なかったりの状態であった。

馬原は、大学院に籍を置きながらの研究所生活のスタートを、三木一平の回想のなかで次のように語っている。

私が三木さんとはじめて言葉を交わしたのは、一九五六年三月初旬、京都から姫路方面行き国電のなかであつた。朝早く出かけたのだろうか、電車のなかはかなり混んでいて、ドア近くにもたれながら、「ところで、君の名前はなにやったかいナ」と三木さんから聞かれたときは、正直ガツカリした。その前日、始めて部落問題研究所を訪れ、新任の挨拶をしたつもりであつたが、実は名前も覚えられていなかったわけである。

正式には、四月からの採用であるが、その前の小手調べとして私にあたえられた仕事は、ちょうどそのころ、兵庫県小野市でたたかわれていた差別行政反対闘争を取材し、雑誌『部落』三月号にルポを書くことであつた。……(略)……九州の田舎から京都にできてまだ二年余り、部落問題については、立命館大学在学中に『部落の歴史と解放運動』『生きていく封建制』(部落問題研究所、一九五四年刊)などを読んでそれなりに理解していたつもりであつたが、未解放部落の実態と部落解放闘争の現実にふれるのは、これが最初である。……(略)……

小野市の闘争は、町村合併に伴う小・中学校の統廃合で、部落を不当に差別あつかひしたことから端を発したものであるが、その過程で、これまでの行政による差別待遇の実態がつぎつぎとバクロされ、いわゆる差別行政闘争として発展してきたものである。……(略)……

翌朝、三木さんに連れられて部落のなかを一巡した。家の貧弱さについては、農村の貧農の生活を体験している私にはさほどの驚きではなかったが、農村にありながらそれが都市以上に密集しているところに、農村一般の貧農の生活と異なる部落の現実をみた。そのあと、三木さんと連れだつて部落のすぐそばを流れる加

古川の堤防に立ったとき、余りに歴然とした差別の風景に、いい知れぬ憤りを押さえることができなかつた。加古川が大きく蛇行して、水流が勢よく岸を洗うその突端に部落が位置しているわけだが、かんじんの堤防がその部分だけ途切れているのである。三木さんは、加古川筋にある部落の大半がそうだと説明してくれた。部落が水害の常襲地帯となるのは当然のことであつた。私は「差別行政」を、実感をこめて体得することができた。

この結果書き上げたのが、無署名の「差別行政に立ちあがる部落」(『部落』第七四号)というルポルタージュであり、馬原の部落ルポの最初である。この時期から六〇年代にかけて、馬原は部落を見てまわり、「三木さんに連れられて歩いた部落の一つ一つが『学校』の役割を果たしてきた」と語っている(11)。

当時の部落の様子は、馬原の雑誌『部落』に掲載されているルポ、調査報告書、『解放への闘いと教育』(一九六三年)、『進路保障』(同年)などの著書を見ていただきたい。ここでは、名著『日本資本主義と部落問題』(一九七一年)から、一九六〇年代前後の部落の様子を抜き出してみよう。京都市のなかでもっとも人口密度の高い中京区では、一ヘクタールあたりの人口密度は二二・三人だが、市内八部落平均のそれは三四二人となっていて、実に一

五倍にも及んでいる。……(略)……

一九六〇(昭和三五)年、大阪八尾市西郡部落で、一人の集団赤痢患者が発生した。……(略)……西郡部落における赤痢菌の感染経路は、三四ヶ所にも及ぶ共同井戸であつた。水質検査の結果、そのうち二六ヶ所の井戸水には、アンモニア・亜硝酸が多量にふくまれていること、細菌検査でも、三四ヶ所全部が、厚生省飲料水検査基準からみて、飲用不適であることがわかつた。七五ヶ所もある共同便所が、いずれも不完全で、老朽化し、そのうえ、一便所あたり二一人以上使用する便所が五一ヶ所、なかには一つの便所で八〇人以上使用しているところもあつて、不衛生をきわめていた、というところに、赤痢患者を大量に発生させた背景があつた。部落の悪い環境が、まさしく、伝染病の温床を形づくっていたといふべきであろう。……(略)……

部落の死亡率は、全国平均をはるかに上まわつて、おどろくべき高さを示している。たとえば、大正年間の人口一、〇〇〇人にたいする西郡部落の死亡率は、最低三七、最高九八だが、全国平均は最低二〇、最高二七となっている。したがって、平均寿命も、明治年間平均二〇・六才、大正年間一八・六才、昭和戦前平均二三・七才、一九六一(昭和三六)年を現在とする昭

和戦後平均三二・五才となっている。日本人の平均寿命が、年とともに飛躍的にのびることは、毎年聞かされることだが、部落では、まだ日本人の戦前の水準にすら遠くおよばないのである。

生命までも差別される部落差別の悲惨さを、抑えた筆で書いている<sup>(12)</sup>。

② 「日本資本主義と部落問題」論 馬原の研究にとっても大きな転換になるのは、一九五九年一月一九日、三井鉱山が六〇〇〇人の首切りを発表して、三池鉱山を中心に展開されるストライキの取材であった。馬原は、一週間以上、三池に泊り込んで部落や闘争の様子を書き続けている。

筑豊には三百近くの未解放部落があるが、その殆どは、山手とか谷あいとかあるいは川筋のきわめて不便なところが存在している。……(略)……

鞍手郡下隈部落では炊事中の妊婦が、突然家もろ共地底に吸い込まれてしまった。死体は今日に至るも発掘されていない。

田川郡上金田部落(二四〇戸)は、かつては県道より二米も高かったが、今日では逆に一米低くなっていて、排水は一応溜池に集めてポンプで揚棄している。一度び雨でも降れば、忽ち部落中水浸しになり、軒先に大

便が浮いて来る始末。二十八年以来、毎年のように赤痢、腸チブス患者が絶えないのもそのためである。

と、部落の状況を伝えている<sup>(13)</sup>。馬原が最も憤りをおぼえたことは、第二組合の「第一組合は特殊部落」という差別発言とともに、「第一組合員と語っていても解放同盟にたいする現地や周囲の期待は、暴力団にたいする労働者階級の『前衛』というそれにあるように思われる」ことだと率直に語っている。「部落＝暴力団」という発想が、第一組合員のなかにも抜けないのである。そこには勿論、「従来、労働者のスト破りに部落の人たちがしばしば利用されてきた否定しがたい事実がある」<sup>(14)</sup>。

三池闘争を経験するなかで、馬原の関心は益々「日本資本主義と部落問題」という方向に進んでいった。三池闘争の直後に書かれた、「筑豊炭鉱における労働力の形成と部落」という論文では、「部落の大部分が、まぎれもなく近世中期以降の商品生産の展開過程のなかで成立し、それが、いわば資本主義的関係の前駆的形態として把握されるならば、部落問題は、日本資本主義の構造、すなわち、資本の支配と収奪機構のなかで適確に位置づけられなければならない。炭坑業に労働力の形成過程のなかで、賤民の動向を追求したのも、そのための一つの試みであった」<sup>(15)</sup>と語っている。

馬原の部落は日本資本主義が拡大・再生産しているとい

う問題意識は、当時の部落史研究の三つの潮流への批判を含んでいた。ひとつは、滝川政次郎の「異民族起源論」、山本政男の「宗教的タブー論」、渡辺実の「古代起源論」などの「反動的部落」論との対決である。またいまひとつは、「資本の法則が貫徹して前近代的な残滓を払拭すればあたかも部落差別が解消するかのような幻想をふりまいて」いた『同和対策審議会答申』（一九六〇年）への批判である<sup>(16)</sup>。そして最後に、これは明記していないが、恩師奈良本辰也の『部落』第一三二号（一九六一年）に発表した、「部落解放の展望」という論文への批判を含んでいた。奈良本論文は、「部落差別＝独占体制」論を批判して、日本資本主義の構造的な転換によって、「資本の側に意識して部落差別を再生産してゆかねばならない必然性は今やない」とまで断言したものである<sup>(17)</sup>。これには、中西義雄・井上清・藤谷俊雄らの批判があつたが、馬原もまた、部落差別は「資本主義の生産関係そのものから、必然的にうみだされる抑圧であり差別で」<sup>(18)</sup>あることを立証することによって、奈良本を批判している。

この「日本資本主義と部落問題」という視角は、とりわけ次の二つの注目すべき提言を生んでいる。ひとつは、「解放令」の評価の問題であり、「解放令のもっていたブルジョア民主主義的意義を再検討してみる必要がある」、「解放令はいわゆる『自由な労働力』をつくりだした」<sup>(19)</sup>

という藤谷俊雄の議論を継承・発展させている。馬原は、「解放令が、部落民を封建的身分制のきずなから法制的に解放し、自由な労働力として資本前にえじきとして投げだしたということの意味するものであり、部落における労働力移動の客観的条件をととのえたものと評価できる」とし、「明治二、三〇年代」は、「部落の労働力が社会的に進出して、資本主義生産の中心部門に入りこむ客観的条件はかなり強かった、といつていいでしょう。炭坑や紡績産業はその例になるかと思えます」とする。しかし、「皮革・製靴独占資本が成立」してくると、「部分的にしる資本主義生産の基幹部門に雇用されていた部落労働者は、徐々に排除され」、「資本主義生産の底辺労働を形成する」としている<sup>(20)</sup>。

また馬原は、部落産業を固定的に捉えるのではなく、「皮革とか草履とかのように封建社会からずっと部落にうけつがれておる伝統的な部落産業と、明治以後あらたに、そういった伝統的な部落産業から派生してきた部落産業と、さらにそういった仕事とは全然関係なしに、部落の低賃金を目当てにして新しく流入してきて部落に定着した部落産業」の三つに区分する。部落が、資本主義によって変貌している側面を問題にしている。その視点は、部落とスラムとの関係を考える時にも貫かれている。馬原は――

産業資本主義の段階ではスラムは、景気の変動につれ

て大きくもなり、あるいは小さくもなったものです。

不景気のときには非常に増大しますが、景気がでくるとだんだんスラムからでていって仕事につくひとが多くなる。そういう意味では景気の変動につれてぼうちょうしたり、あるいは縮小したりしたのがかつてのスラムだったと思います。しかし独占資本主義の段階では、スラムの性格も、構造も質的に変わってまいりません。スラムを構成する人の大半がすでに五年なり十年なり、ときには二十年も居住歴をもっておる。スラムの構成者はだんだん沈殿していつて、ほぼ固定化してくるというわけです。そうしますと、だんだん部落に近い性格をもってくる。ですから部落があるかぎりそういう貧困者の群はますます部落の周囲にあつまって新しい部落が形成されていく。部落はますます発展していかざるを得ません。

として、「スラムの部落化」、「部落のスラム化」という現象が、近代日本のなかで都市部落を拡大してきた要因であることを指摘している<sup>(21)</sup>。

この問題は、『日本資本主義と部落問題』のなかで一層深められ、「封建時代の賤民集落ないし賤民集団」を核とするスラムとして、①えた身分の集落(神戸番町)、②ひん身分の集落(東京の四谷鮫河橋・下谷万年町・芝新網、名古屋の王子町、大阪の名護町など)、③下層社会集団を、

特定の地域に隔離し集中して形成されたもの(神戸新川・横浜清水谷戸)とに区分される。これは、隅谷三喜男らの労働経済論への批判を含んでおり、「原蕃期から産業革命期にかけての賃労働の役割からみると、むしろ没落士族層より旧賤民層の方が大きかった」と断言される<sup>(22)</sup>。隅谷らの農村・都市「雑業」層という規定を批判して、賤民系譜を引く賃労働分析の重要さを提言している<sup>(23)</sup>。

また、「マッチ工業」を見る場合にも、『マッチの巻』(一九〇三年)を引用して――

黄燐は之を扱つてゐる際に始終蒸氣——燐酸を蒸発するので工人之を呼吸すれば、骨大症にかかつて一命にさわることもある。(中略)この製造所の一町四方は異臭鼻をついてとても耐えたものではありません。

(中略)この職工が銭湯に往けば湯の温度で蒸されると見えて満身から大蒜に似た燐の臭を發してその傍の銭湯客は皆耐えられなくなつて逃出すでしせう。銭湯では皆黄燐の職工の入浴はお断わりすることが常です

ね。  
と、マッチ工業が「低賃金に加えて、労働が危険で、附近に『異臭』をまきちらし」、職工たちが差別されている原因を見逃さない<sup>(24)</sup>。

③ 水平運動史の研究へ この筑豊闘争をルポし、「日

本資本主義と部落問題」という終生のテーマと取り組んでいた頃の馬原は、赤貧洗うことがごとき生活のなかにあった。そのなかで一九六〇年、日本共産党に入党した。そして、五三年に結婚し七年間九州で馬原の帰りを待っていた松岡郁が、ついに一九六〇年に京都へ出てくる。当時の馬原は部落問題研究所の給料で生活しており、それも出たり出なかったりで、郁の非常勤の講師料が生活の主な糧であった。郁は、長女穂波を妊娠しながら、他人の産休代用教員で半年間、三つの小学校を転々とした。穂波を出産した時も、病院代が払えず、なかなか退院できなかったという。馬原は、学生・大学院時代買った本を、古書店にせっせと運び、書架はからっぽになった。その後、二女真澄、三女早苗の三人の子供に恵まれた。

馬原の生活を見るに見かねた先輩で美術史家の赤井達郎が、一九六三年、大阪工業高等専門学校の特任講師の口を探してきてくれた。給料は八〇〇〇円から三万円に跳ねあがり、毎月確実に貰えるようになって、初めてテレビや冷蔵庫を買った。六三年から暫くは、大阪工専の教育に専念していたが、立命館大学の理工学部と同和教育の授業も担当していた。当時の学生たちにとって、部落問題への関心は高かった。

一九五〇年代後半から六〇年代前半にかけては、部落問題が社会問題として浮上し、「国民的課題」として提起さ

れるようになる。キリスト者を始め、広汎な人びとが部落解放運動に参加するようになった。ところが一九六六年一月、解同京都府連の三木一平・塚本景之の除名問題から発展して、部落問題研究所のあった文化厚生会館を「解同」朝田派が占拠するという事態が起った。戦後最初の本格的な部落解放運動の分裂であった。当時、馬原は大阪工専の仕事に従事していたが、「事件は衝撃的であり、部落解放運動だけは分裂することはないと考えていた」と語っている。

この時期から、馬原はもう一度、積極的に部落史の研究に戻ってくる。一九七〇年の広島市で開かれた第八回部落問題研究者全国集会で、水平運動史の共同研究を提唱する(25)。

現在部落解放運動は、水平社創立五十年の歴史のなかで、ひじょうな困難なる事態に直面しています。運動の理念をめぐる対立、組織上の不団結は、単に部落解放運動自体に深刻な打撃をもたらしているばかりではなく、わが国の民主主義運動にもきわめて不幸な影響をあたえています。

私たちは、部落解放運動五十年の歴史から、いまこそ真に部落問題を完全に解決する解放理念と、その実践的すじ道を学びとり、科学的な解放理論を創造的に発展させなければなりません。その意味で、水平社創立

五十周年の記念すべき年を二年後にひかえた今日、水平運動の歴史を全面的に明らかにすることは、きわめて実践的な意義をもつものと思います。

『水平運動史の研究』の執筆者を求めて、全国を駆けめぐっている馬原の様子は、次の新藤東洋男の回想からわかる<sup>(26)</sup>。

私と研究所とのかかわりは、大牟田市役所前の「うどん屋」で馬原鉄男さんとの会談であった。文部省科学研究助成金をえて「水平運動の総合研究」の共同研究への参加の要請のために大牟田まで馬原さんが私を訪ねて来て下さったのであった。私は「九州における水平運動の研究」を担当していた。この水平運動の研究の成果は、部落問題研究所から一九七一年から刊行をはじめ、七三年一月にかけて全六巻を刊行された。この時期には、研究所の野村宣行さんに大変お世話になったことも記録しておかなければならない。……(略)……野村さんの恩師・前田一良先生のお宅に伺ったことも思い出される。

水平運動史の研究では、馬原の陰で立命館大学大学院の後輩野村宣行が、いつもサポーターとしての役割を果たしていた。しかし、この野村も、一九七六年、三三歳の若さで不帰の人となる<sup>(27)</sup>。野村の死を、家族とともに最も惜しみ、悲しんだ一人は馬原である。

馬原は、この共同研究を踏まえて、一九七二年に『水平運動の歴史』を刊行する。同書を含めた馬原の水平運動史には、「水平運動における社会主義の影響力、労働運動との階級的連帯」『三角同盟』論への高い評価、そして全水青年同盟—全水無産者同盟—解消派<sup>(28)</sup>への高い評価に對して、全水社会民主主義勢力の評価の必要や<sup>(29)</sup>、「全水創立における民族自決論の影響や、初期水平運動における宗教的(とりわけ浄土真宗)影響等」の欠落などが指摘されている<sup>(30)</sup>。

馬原自身も、「第一に、全体の叙述が、それぞれの時期のたたかひの頂点、解放理論の頂点をつないだものとなっていて、部落解放運動の積極的な側面がやや一面的に強調されるといふ傾向をもっているように思う」。「第二、第一の問題とも関連するわけであるが、先進的な理論やたたかひを連ねていく反面として、権力の融和政策と小ブルジョア中間層の改善、改良主義との区別を無視してすべてこれを敵視したり、圧倒的多数を占める無党派的な部落大衆の日常的な生活要求や運動を軽視するといふ傾向があったように思う」。「そして第三に「日本資本主義の発展とともに、部落と部落民の階級・階層関係がどのように変化し、部落解放の主体的条件がどのように成熟したのか、もし成熟しなかつたとすればなにがそれを阻んできたのか、ということとを明らかにすることが望まれている」と語っている<sup>(31)</sup>。



またこの時期、馬原は脇田修らと協力して部落問題研究所の歴史部会を再建し、一九七二年の『部落問題研究』第三三輯の特集「歴史における身分制の再検討」に見られるような、吉田晶・黒田俊雄・脇田修・藤谷俊雄らの高い水準の議論を、部会のなかで展開していった。しかし、現実の要請からも、一九七〇年代の後半からの馬原の研究課題は、戦後史・現状の解放運動が中心になってくる。

そして馬原は、一九八〇年から立命館大学経済学部で職場を移し、八八年度から九〇年度までの三年間、立命館中高等学校の校長を兼務している。心臓病で入院した直後の校長兼務という激務は、馬原の生命を縮めたかもしれない。しかし、この三年間、馬原の教育者としての真価が、いかなく発揮されている。馬原校長は、規則で人間を縛るのではなく、生徒に対しても教師に対しても、率先して自分が身体で模範を示したといわれている。例えば、校内に空缶が落ちていれば、馬原校長が自分で拾いにいったという。髪の毛を金髪に染めている女の子が、よく馬原校長の前をウロウロしても一度も叱らず、その子が自分から、大学に行って「金髪にサヨナラしました」という手紙を、馬原校長に出してきた時、誰よりも喜んでいたという。どんな人間に対しても優しく平等に接する、これが馬原の三ヶ所村の教師時代から持ち続けてきた、強い信念ではないだろうか。

その馬原も、一九九二年七月二日午後一時三十分、京都市左京区の安井病院で逝去した。享年六一歳。三日の通夜には八〇〇人、四日の告別式には二〇〇〇人の人が参列した。

おわりに

今日の部落史研究に対して、もっと一九六〇・七〇年代の馬原の部落史研究から学んでもらいたいと考えて小論をしたためた。最近流行の「都市下層論」も、馬原らの研究を十分に踏まえて進められているとは思えない。

しかし今日から見ても、馬原の研究に問題がないわけではない。六〇年代の馬原の研究は、現状においても差別の拡大・強化論であり、その淵源を歴史的に探るといふ方法であった。この議論は、「国民的融合」論の台頭以降、馬原の部落史のなかで何が残り何が変わったのか、まだ充分総括されているとはいえない。

馬原自身は、かつての自分の部落解放論のなかには、部落の窮乏化が進めば、一般の労働者・農民との統一戦線が拡大するという「窮乏革命」論的な弱点があった、と語っている。そのことが、部落のプロレタリア化を過大に評価し、水平運動における「左派」の過大評価にもなったという。部落の中間層や上層の改良主義的な運動を十分に捉え

られなかった、ともいう。馬原らしい謙虚な反省であるが、馬原が提起した「賤民系譜を引く賃労働者」や「差別的労働市場」の問題は、今日的な観点から、再度発展させていかなければならない課題である。

そしてなにより、馬原鉄男という人物の生き方から、われわれはもっと学ばなければ、ならないのではないだろうか。それにしても六一歳、なんとも早い別れであった。

## 註

- (1) 木全久子「かお 馬原鉄男氏」、『部落』第三九九号、一九八〇年)七〇頁。以下、本稿は一九九一年二月二五日、馬原研究室で行なった聞き取りをもとにしている。
- (2) 竹内理三編『角川日本地名大辞典 宮崎県』(角川書店、一九八六年)七〇七・七〇九頁。
- (3) 馬原鉄男「部落はどうなっているか」(部落問題研究所『部落問題入門』部落問題研究所、一九六二年)六六頁。
- (4) 木全前掲記事、七〇頁。
- (5) 同右。
- (6) 馬原鉄男「沖縄、奄美の友よどこへ行く」、『部落』第九八号、一九五八年)六九・七一・七五頁。
- (7) 前掲『角川日本地名大辞典 宮崎県』三七八・三四〇～三四一頁。
- (8) 大瀨明男「三ヶ所中学時代の馬原先生」(『部落』一二月特別号、一九九二年)一二二～一二五頁。
- (9) 立命館大学文学部日本史クラス「中学校の歴史教科書批判」(『日本史研究』第二四号、一九五六年)九六～九七頁。
- (10) 藤谷俊雄他『部落問題研究所の四十年』(部落問題研究所、一九八八年)一〇頁。
- (11) 馬原鉄男「部落問題研究と三木さん」(故三木一平氏合同葬実行委員会『不屈』部落問題研究所、一九八一年)二一～二二頁。
- (12) 馬原鉄男「日本資本主義と部落問題」(部落問題研究所、一九七一年)三一〇～三一五頁。
- (13) 馬原鉄男「黒い羽根」そのかげにひそむもの」(『部落』第一二二号、一九六〇年)六八～六九頁。
- (14) 馬原鉄男「三池争議と部落問題」(『部落』第一二五号、一九六〇年)一三・一七頁。
- (15) 馬原鉄男「筑豊炭鉱における労働力の形成と部落」(『新しい歴史学のために』第九八号、一九六四年)六頁。
- (16) 馬原鉄男「部落問題」(馬原鉄男他編『現代日本の社会問題 三』汐文社、一九七〇年)一～五頁。
- (17) 奈良本辰也「部落解放の展望」一九六一年(部落問題研究所編『部落問題セミナーI』部落問題研究所、一九七〇年)一六頁。
- (18) 馬原前掲「部落問題」九頁。
- (19) 藤谷俊雄「日本資本主義と部落問題」一九六五年(同『部落問題の歴史的研究』部落問題研究所、一九七〇年)二〇六～二〇七頁。
- (20) 馬原鉄男「未解放部落における労働力の流動形態」(『部

- 落』第一九〇号、一九六五年) 六五〜六七頁。
- (21) 馬原前掲「部落はどうなっているか」七三・八九頁。
- (22) 馬原前掲『日本資本主義と部落問題』四五〜五〇頁。
- (23) その後の馬原の研究としては、同「日本都市下層社会研究覚書」(『部落問題研究』第七四輯、一九八二年)、同「『日本資本主義と部落問題』論」(部落問題研究所編『部落史の研究 近代篇』部落問題研究所、一九八四年) 参照。
- (24) 馬原前掲『日本資本主義と部落問題』五三頁。
- (25) 馬原鉄男「水平運動史研究の成果と課題」(『部落問題研究』第二九輯、一九七一年) 四八頁。
- (26) 新藤東洋男「研究所とのかかわり」(『会報』第七五号、一九八九年) 二頁。
- (27) 野村宣行『部落問題の研究と運動』(野村千代子発行、一九七七年) 参照。
- (28) 藤野豊『水平運動の社会思想史的研究』(雄山閣、一九八九年) 一七頁。
- (29) 岩村登志夫「反戦反ファシヨ闘争と水平社」(『部落問題研究』第三九輯、一九七三年)。
- (30) 藤野前掲『水平運動の社会思想史的研究』一七頁。
- (31) 馬原鉄男「戦後部落解放運動史研究の問題点」(部落問題研究』第四七輯、一九七六年) 八〜九頁。
- (付記) なお本稿は、拙稿「馬原鉄男の部落問題研究の歩み」(馬原鉄男・掛谷幸平編『近代天皇制国家の社会統合』文理閣、一九九一年)に加筆・訂正したものである。個人的な事情から、全面改訂できなかったことを、馬原先生と編集部におわびする。
- なお馬原先生と約束していた、先生編の『天皇制国家の統合と支配』(文理閣)が昨年二月、私の本(『近代日本の差別と村落』雄山閣)が、今年の四月に刊行される。ともに先生の霊前に捧げたい。
- (小樽商科大学)